

Schindhelm (s. n.) を巡る謎

The mystery of *Schindhelm* (s. n.)

HOHENBERGIA-Serrate Tanks-にて、掘り下げた「真のレオポルドーホルスティ」に関しての考察。そこで辿りついた *Schindhelm* (s. n.) という名のクローン。ついにレオポルドーホルスティの謎が解明された、と思いきや、出版後に新たな疑問が浮上した。この謎を再び佐藤氏に紐解いてもらった。

ープロヴェナンスについて詳しく考察した *Schindhelm* (s. n.) に新たな謎が浮上したそうですが？

私が本書の中でプロヴェナンスとロカリティについて考察したクローンである *Schindhelm* (s. n.) は、ドイツプロメリア界の重鎮であるハーマン・プリンスラー (H. Prinsler) 氏から直接導入した株です。導入した6株のうち、既に花序が上がっている一番大きな株 (以下、Best と称す)⁽¹⁾ と、下葉が黄化して徒長気味の一番貧相な株 (以下、Worst と称す)⁽²⁾ を手元に残し、残りを2株ずつ SPECIES NURSERY の藤川さんと STRAIGHT の川端さんに送りました。Best と他の5株はどれも外観が異なるような印象がありましたが、「Best だけ別な場所で栽培していたのだろう」と思っていました。氏も「自分のレオポルドーホルスティはすべて同じ親株から分けたクローン」と言っていましたし。この親株の入手の経緯については2014年の国際プロメリア協会誌に「3年前にウーヴェ・シャーフ (U. Scharf) 氏から入手」との記述があります。それから数年が経過し、手元の Worst は本書の

表紙とほぼ同じ株姿に化けました。導入当初の貧相な株姿とは似ても似つかない魅力的な外観です⁽³⁾。一方で、Best の方はその間にいくつか子株を生じ、両者を同じ環境下で栽培することができました。その結果、どう見ても両者はクローンには見えないという結論に至りました。今一度、プリンスラー氏に確認したのですが、「私の記憶では、ウーヴェ・シャーフ) からはレオポルドーホルスティは1株しか入手していない。もしかしたら、別の機会に入手したことがあったのかもしれないが、そうだとすると、それは彼からだろう」とのことでした。つまり、氏の記憶は曖昧なもの、6株の中にいずれもシャーフ氏由来の異なる2種のクローンが入っていた可能性が高くなったのです。

ーシャーフ氏はどのようにして *Schindhelm* (s. n.) を入手したのでしょうか？

2011年にシンテーム氏本人から直接入手したそうです。当時、一緒に入手したドイツプロメリア協会の幹事に確認しました。よって、シャーフ氏は入手とほぼ同時期にプリンスラー氏にこのクローンを渡していたと考えられます。入手した株に子株が付いていたか、複数株を入手していたのでしょうか。

ーシンテーム氏からシャーフ氏、そしてプリンスラー氏へと、確実に *Schindhelm* (s. n.) が渡っているとなると、では、日本へ来た Best と Worst の一体どちらが *Schindhelm* (s.

n.) なのか？ プリンスラー氏の記憶が曖昧だと、これは困りましたね。

それを確かめるためにハイデルベルグ大のニコ・シュローダー (C.N. Schröder) 氏にこれら2クローンの写真を送って意見を求めるとともに、同大のリヴィング・コレクションにある *Schindhelm* (s. n.) の写真を送ってもらいました⁽⁴⁾。その結果、同大の *Schindhelm* (s. n.) は Best と酷似しており、ニコ氏も同じ見解でした。つまり、Best の方が *Schindhelm* (s. n.) と考えられ、本の表紙と P-29 のクローンとは別物だったのです。

なお、P-91で「これほどトリコームが多いクローンは見たことはありません」と述べているのは Best のことですし、P-98の花序写真は Best を撮っています。よって、Best=*Schindhelm* (s. n.) とすると、これらは *Schindhelm* (s. n.) を参照した正しい記述になります。一方、本の表紙と P-29 の写真は Worst です。

では、この魅力的な Worst は一体何なのか？謎が深まりました。シャーフ氏とはここ数年連絡が取れない状態ですので、直接確認をすることができません。ただ、本を書く過程で氏が数年前にレオポルドーホルスティの謎について迫っていたことを知っていました。氏は真のレオポルドーホルスティの候補として、以下の3クローンを挙げ、すべて入手したと述べています。

- 1 ヴォルフガング・シンテーム (W. Schindhelm) が採取した個体 (モーホ・パイ・イナシオ産)
- 2 ハンブルク植物園にある“*Horst 6A*”とラベルされた個体 (タイプロカリティまたはその近傍産)

3 ハイデルベルグ大にあるラウー・ナンバーのついた個体 (タイプロカリティと異なりセアブラ産)

1は *Schindhelm* (s. n.) のことです。では、2についてはどうでしょうか。実は氏は「(ホロ) タイプの生きた後代は存在するのだろうか？もしするなら、それはハンブルクの個体ではないか」とも述べています。今となつてはその根拠は分かりません。ただ、ハンブルクの個体を“タイプロカリティまたはその近傍産”として認識していることから、ロカリティ情報を主な根拠としていた可能性があります。しかし、本で明らかにしたように、そもそもレオポルドーホルスティのタイプロカリティは間違っているのです。そこで、2の素性について明らかにする必要が出てきました。ハンブルク植物園に確認したところ、「*Horst 67*という個体はないが、データベースによると当園のレオポルドーホルスティは1967年にカレル・ナイズ (K. Knize) がバイアー州グラン・モグルで採取」との情報を得ることができました。この短い文に込められたキーワードすべてにこのプロヴェナンスの真偽を解くカギが隠されています。1967年、カレル・ナイズ、バイアー州、グラン・モグル…。レオポルドーホルスティを巡る謎を知っていれば、このプロヴェナンスはそもそもまったくの誤りであることが分かります。“1967年にカレル・ナイズがバイアー州グラン・モグルで採取”はあり得ないのです。

カレル・ナイズはその筋の人にはKKとして知られています。彼と親交のあったデレクおじさんによると、おじさんと一緒にコピアポア (*Copiapoa*) について調べていた1970年代、彼はヘルーとチリをバイクで走り回り、種子の採集に精を出していたそうです。バイクでは種子と違って多くの植物は運べませんから、植物、しかもプロメリアを採取していたとするにはそれなりの根拠が必要でしょう。そもそも、KK

がブロメリア、主にティランジアに足を踏み入れた時期は70年代の終わりと考えられています。レオポルド・ホルスト (L. Horst) はブラジルで多くの採集をしましたが、KKの主なフィールドはペルーとチリです。これらのことから、KKが60年代のブラジルでレオポルド・ホルスティの生体を採取した可能性は非常に低いと言えます。

何より、この個体のロカリティをホロタイプのそれと同一としているこのプロヴェナンスはかなり怪しいのです。なぜかと言いますと、ハンブルクにある個体は誰かがレオポルド・ホルスティと同定し、レオポルド・ホルスティならグラン・モグルだろうと適当にロカリティをくっつけたように思われるからです。本でも解説したように、バイエア州にグラン・モグルなどという地名は存在しないのです。これはラウーが犯した間違いです。それなのに、なぜレオポルド・ホルスティが発見される20年以上も前に採取されたとされる個体のロカリティが、ラウーが間違えてつけたレオポルド・ホルスティのタイプロカリティとまったく同じなのでしょう？ つまり、「レオポルド・ホルスティだろう」という判断ありきで、ホロタイプと同じロカリティを後からくっつけた可能性が高いのです。この適当な作業をした人はホロタイプのロカリティがそもそもこの世に存在しない地名であることに気づいていなかったのでしょう。この個体が *Horst 67* を指すのかはつきりしませんが、“67”が符合する点からして何らかの関係があることが示唆されます。

なお、レオポルド・ホルストが採取した植物はHUで始まるフィールドナンバーで管理されています。*HU 67*はフライレア (*Fraillea*) に振られた番号ですので、*Horst 67*とは関係がないようです。ちなみに、*HU 357*はディスコカクタス (*Discocactus*) に振られた番号であり、いわゆる sp. 357とはまった

く関係がありません。

ーちょっと脱線しますが、HU以外のフィールドナンバーの中に sp. 357に対応する種は存在するのでしょうか？ sp. 357という名で流通しているホヘンベルギアも、その由来がよくわからないですよ。

サポテン・多肉植物関係のフィールドナンバーはデータベース化されており、そこには多くのブロメリアも含まれています。それらのフィールドナンバー353種を調査したところ、“357”を含むナンバーはHUを含めて全部で86種ありましたが、いずれもブロメリアとは無関係でした。また、ラウー・ナンバー (Rauh-Nummer) についても調べましたが、該当する番号はありませんでした。よって、sp. 357は名のあるコレクターに起因する番号ではないと考えられます。

さて、シャーフ氏が認識していた *Horst 67* とハンブルク植物園のレオポルド・ホルスティが同一と仮定すると、そのロカリティ “タイプロカリティまたはその近傍産” は誤りであると考えられます。よって、「(ホロ) タイプの生きた後代は存在するのだろうか？ もしするなら、それはハンブルクの個体ではないか」との氏の仮定も同じく否定されるでしょう。結局、ハンブルク植物園の個体の正体は謎のままですが、Worst=*Horst 67*の可能性は残ります。とは言え、「プリンスラー氏が *Schindhelm* (s. n.) とは別の機会にシャーフ氏から別のレオポルド・ホルスティを入手したと仮定すると、それは *Horst 67* の可能性がある」ぐらいにしか言えないでしょう。採用するには確証が少なすぎる仮説ですね。

最後の3ですが、ハイデルベルグ大のデータベース

によると *Rauh 70116* のことを指していると思われる。採取地もセアブラで合致します。実は調査の過程でこの *Rauh 70116* について新たな事実が判明しました。当初ハイデルベルグ大が *Rauh 70116* として公開していた生体写真はまったく別のクローンである *Pfister* (s. n.) の写真だったのです⁽⁵⁾。従って、本の P-91 にある *Rauh 70116* の開花写真に関する説明も正しくは *Pfister* (s. n.) のこととなります。ただし、フィールドノートに関する部分は *Rauh 70116* のことで間違いありません。ややこしい話ですが、要は生体のラベルやフィールドノートの情報が誤った画像に結び付けられていたのです。なお、*Pfister* (s. n.) は現状では未同定であり、*Hohenbergia* sp. とされています。*Pfister* (s. n.) にせよ、正しい *Rauh 70116* にせよ⁽⁶⁾、Worstとまったく似ていないことが分かります。よって、Worst=3でないことは明らかです。つまり、Worstはシャーフ氏の言う1から3のいずれにも該当しないクローンであると考えられるのです。

ここまでの調査で Best はおそらく *Schindhelm* (s. n.) であり、Worstはそれとは別のクローンであることが推察されました。さらに確認のために、シュローダー氏から得たハイデルベルグ大の *Schindhelm* (s. n.) の写真をプリンスラー氏に送ったところ、驚くべき返答とともに、氏の栽培下にある *Schindhelm* (s. n.) およびそのラベルの写真が送られてきました。氏が *Schindhelm* (s. n.) として栽培しているクローンは何と Worst の方だったのです⁽⁷⁾。

しばらく途方に暮れていたのですが、プリンスラー氏の *Schindhelm* (s. n.) のラベルを見たところ、あることに気づきました。では、そのラベルを読み解いてみましょう⁽⁸⁾。

Hohenbergia leopoldo-horstii

Brazil, Morro de Ignacio, 45 km E of Seabra, 14 Feb 1989, ca, 1000 m

「ブラジル、モーホ・デ・イグナシオ、セアブラの45 km 東、1989年2月14日、標高約1000 m」と記されています。モーホ・デ・イグナシオ (Morro de Ignacio) はモーホ・ド・バイ・イナシオ (Morro do Pai Inácio) の間違いでしょう。セアブラの45 km 東とありますので、地図上のモーホ・ド・バイ・イナシオの位置と完全に一致します。なお、このラベルはシャーフ氏の直筆であることをドイツブロメリア協会の幹事に確認しています。

一方、ハイデルベルグ大の *Schindhelm* (s. n.) のプロヴェナンスは下記とされています。

Provenance: Brasilien, Est. Bahia, Chapata Diamantina, an der BR 242, wenige Kilometer hinter dem Berg Morro Pai Inacio in Richtung Seabra, rechts auf den ersten ansteigenden rotbraunen Sandsteinfelsen, 1000 m

Collector: W. Schindhelm (s.n.), 1996-00-00

Source: W. Schindhelm, 2004-11-22

プロヴェナンス: ブラジル、バイエア州シャバダ・ジ・アマンティーナ、セアブラに向かう242号線沿い、モーホ・バイ・イナシオと呼ばれる山の数 km 手前、最初に見える赤茶色の岩場の右側、標高1,000m

採取者: W. Schindhelm (s. n.), 1996年

寄託者: W. Schindhelm, 2004年11月22日

両者を比較すると興味深いことに気づきます。採取年が異なるのです。つまり、プリンスラー氏のクローンは1989年採取、ハイデルベルグ大のクローンは1996年採取です。両方とも *Schindhelm* (s. n.) なのですが、採取年が異なる別クローンだと思わ

れます。おそらく採取場所もモーホ・ド・バイ・イナシオとは言え、まったく同じではないのかもしれませんが。よって、Worstは*Schindhelm* (s. n.), 1996ではなく、*Schindhelm* (s. n.), 1989になりますね。

—なるほど、ともに*Schindhelm* (s. n.) だったのですね。Best=*Schindhelm* (s. n.), 1996でWorst=*Schindhelm* (s. n.), 1989、だったと。

しかし、話はこれで終わりではありません。*Schindhelm* (s. n.), 1996と正しい*Rauh 70116*が酷似しており、写真からの外形では区別がつかないのです^(4, *6)。

*Rauh 70116*のプロヴェナンスは下記とされています。
Provenance: Brasilien, Est. Bahia, Chapata Diamantina, bei Seabra, 400 m
Collector: W. Rauh (Rauh 70116), 1989-03-21
Source: W. Rauh
プロヴェナンス: ブラジル、バイーア州シャパダ・ジアマンティーナ、セアブラ付近、標高400m
採取者: W. Rauh (Rauh 70116)、1989年3月21日
寄託者: W. Rauh

Schindhelm (s. n.), 1996同様、シャパダ・ジアマンティーナのセラブラ付近で採取されています。採取地の標高は異なりますが、黒紫色のロゼットや濃いトリコームなど外形的には*Schindhelm* (s. n.), 1996と非常に近い系統に見えます。つまり、Bestはハイデルベルグ大の*Schindhelm* (s. n.), 1996なのか、*Rauh 70116*なのか、さらにはまったくの別クローンなのか写真からは同定できないのです。ただ、シャーフ氏由来だと仮定すると*Schindhelm* (s. n.), 1996の可能性の方が高

いと思われます。

— Worst=*Schindhelm* (s. n.), 1989は、まだ未開花で同定できませんし、Bestも*Schindhelm* (s. n.), 1996か*Rauh 70116*か判断できないとなると、謎はまだまだ続きそうですね。

そもそもハイデルベルグ大ですら、こちらの問い合わせに対してクローンの取り違えが判明するくらいです。よって、Bestの正体をこれ以上追跡することは困難でしょう。それでも、これほどトリコームが濃い特徴的なクローンは他にはないため、適切なクローン名を付与したいところです。ダン・キンナード氏に由来するクローンがダン・クローン (Dan Clone) として流通していることを踏まえ、同様にハーマン・プリンスラー氏にちなみ、HP Cloneと仮称することが妥当かなと。更なる情報が得られた時点で、正しい名称またはよりふさわしい名称に更新すれば良いと考えます。また、一方のWorstはその名に反して非常に魅力的なクローンであり、本の表紙を飾るべきクローンであったことは間違いありません。



(*1)

導入当時のBestの株姿および花序の形態

黒紫色のロゼットと濃いトリコームが特徴。導入した時点で既に花序が上がっている。幼株はさらにトリコームが濃いため、より縮めて栽培した場合の変化に興味を惹かれる。



(*2)

導入当時の Worst の株姿

*1 の Best とあまりに異なる株姿であるが、導入当時は「すべてクローン」というプリンスラー氏の言葉を信じていた。



(*3)

導入約2年後の Worst の株姿 (*2 と同株)

適切な栽培条件下における株姿の変化を示す良い見本。



(*4)

ハイデルベルグ大栽培下の *Schindhelm* (s. n.), 1996

1996年にバイエラ州シャバダ・ジアマンティエーナのセアブラ付近でシンテーム氏により採取された。下部の花穂には短い花柄があるが、先端に近づくにつれ、ほぼ無柄になる。ロゼットは黒紫色に染まり、濃いトリコームが載る。

Photographer: C. N. Schröder © Copyright Universität Heidelberg/Botanischer Garten



(*4)

ハイデルベルグ大栽培下の *Schindhelm* (s. n.), 1996

Photographer: C. N. Schröder © Copyright Universität Heidelberg/Botanischer Garten



(*5)

ハイデルベルグ大栽培下の *Pfister* (s. n.)

当初はこのクローンが *Rauh 70116* として公開されていた。現状では *Hohenbergia* sp. として整理されている。緑色のロゼットおよび半下垂の花序が特徴である。下部の花穂につく花柄は *4 および *6 の 2 クローンと比較するとかなり長い。

Photographer: T. Stolten © Copyright Universität Heidelberg/Botanischer Garten



(*6)

ハイデルベルグ大栽培下の *Rauh 70116*

シュローダー氏の整理により、このクローンが正しい *Rauh 70116* とされた。1989年にバイエラ州シャバダ・ジアマンティエーナのセアブラ付近でラウー本人によって採取された。写真から得られる情報だけでは *4 の *Schindhelm* (s. n.), 1996 との区別は困難である。

Photographer: C. N. Schröder © Copyright Universität Heidelberg/Botanischer Garten



(*6)

ハイデルベルグ大栽培下の *Rauh* 70116

Photographer: C. N. Schröder © Copyright Universität Heidelberg/Botanischer Garten



(*7)

プリンスラー氏栽培下の *Worst*

それぞれ異なる環境で栽培した2個体とのことである。*3と比較すると本クローンに及ぼす環境の影響が良く分かる。ちなみに、プリンスラー氏は50年以上ナーサリーを営んでいたが、現在は廃業しており、植物の販売は行っていない。

Photographer: H. Prinsler © Copyright H. Prinsler

(*8)

プリンスラー氏栽培下の *Worst* のラベル

これによって *Worst*=*Schindhelm* (s. n.), 1989 であることが明らかになった。字体はシャーフ氏による。

Photographer: H. Prinsler © Copyright H. Prinsler